

第37回 日本動物児童文学賞の受賞者及び入賞作品

第37回日本動物児童文学賞には、122作品の応募があり、児童文学関係学識経験者による第一次審査を経て、動物福祉・愛護関係学識経験者や関係省庁関係者等からなる第二次審査委員会を7月29日に開催し、下記のとおり入賞作品として、大賞1作品、優秀賞2作品、奨励賞5作品が選定された、なお、受賞作品の表彰が令和7年9月23日開催の動物愛護週間中央行事の屋内行事にて行われた。

入 賞 作 品

【日本動物児童文学大賞】

「春をよぶシャッター」 にしの桃子（愛知県）

〈受賞理由〉 主人公・アキラのように、「助けたい」思いがあっても、現実的な制約から行動に移せずにもどかしさを感じたことがある人は少なくないだろう。

それでも諦めることなく母親を説得し続け、里親探しのために人付き合いが苦手な自分と向き合いながら、行動を重ねていくアキラの姿からは、目的のために苦手なことにも挑戦する勇気の大切さが伝わってくる。

著者の猫の保護活動での実体験を基に、説得力とリアリティを持って描かれているため、動物との関わりの中で、人とのつながりや自己発見につながる過程が一層鮮明に描写されている。

また、動物と暮らすことで心が豊かになり、前向きな変化が生まれる様子が、動物を迎えることの魅力を改めて感じさせてくれる作品である。

【日本動物児童文学優秀賞】

「ロクを見つけた日」 渡部麻実（千葉県）

〈受賞理由〉 主人公・浩介が猫を見つけた場面や、傷ついた猫の様子、さらに母のお気に入りのカーディガンで汚れた猫を包むことをためらう気持ちなど、状況や心情の描写が細やかで、物語への没入感を高めている。

助けても不自由な体で暮らさなければならぬことや、最後まで介護が必要であることを話す場面では、命を救うことの責任と現実の重さに気づくことができる重要な場面となっている。

また、大人になると現実を考えると純粋に助けたいという気持ちだけでは行動できなくなる中、自分は冷たい人間なのかもしれないと感じる母親の気持ちに共感する大人の読者も多いのではないだろうか。

命だけではなく獣医療に関しても深い学びにつながる貴重な作品である。

「わたしはインターン」 さいだ・としひろ（三重県）

〈受賞理由〉 主人公・さやかがペットショップの店長になる夢を持ち、特別に叔母の店でインターンとして一週間働くことになる、地道で手間のかかる作業や、動物への細やかな配慮を通して、飼い主としての責任を学ぶ過程が丁寧に描かれており、学びの一つ一つが段階的に積み重ねられているため、読みやすく理解しやすい作品となっている。

作品内では、動物販売業に関する規定や飼い主として事前

に備えるべきことが紹介されており、適正な飼養の大切さを伝えるうえで有用な内容となっている。

本作が入り口となり、読者が自ら調べたり考えたりするきっかけとなることが期待できる作品である。

【日本動物児童文学奨励賞】

「ピンクがピンクに染まったら」

おーた みか（愛知県）

〈受賞理由〉 主人公・文乃は、姉の綾香、両親とマンションで暮らしている。綾香は血統書つきの子犬を飼いたがるが大型犬のため断念することに。その後、出先で野良の子猫と出会った文乃はその子を飼いたいと提案するも綾香に却下される。子猫が心配で立ち去りがたい文乃のもとに同級生の河合が現れ、河合のおかげで子猫は無事ボランティア団体に保護される。子猫を迎えたい文乃は河合から命を迎え入れることの意味を教わる。

尊い命を迎え入れることは、「可愛いから」という理由だけでは不十分で、覚悟や責任が伴うことだと、物語の中で自然と学ぶことができる。また、保護猫ボランティアがどのように動物のために働いているのかについても理解を深められる作品となっている。

姉の態度の変わり様は幼くも見えるが、その素直さが猫への印象の変化を効果的に表現している。

「お化けじゃないぞ」 小川かをり（東京都）

〈受賞理由〉 めんどくさがり屋で自己中心的な性格の主人公・田茂は、ある寒い早春の夜、寒くて眠くてこたつから出るのが嫌で、うさぎの寝床ヒーターを入れることを怠った。翌朝、年老いたうさぎが死んでいるのを発見する。

田茂は深い自責の念に苦しむが、死んだうさぎが夢に現れて「いつでも田茂の胸の中にいる」と伝えてくれたこと、小学校の庭でボランティアをするおじいさんとの共同作業、友達の新井との会話を通して、自分を責める気持ちと和解していく。最終的に田茂は、今生きている動物たちの世話を責任持って行うことで償いを始める。

子どもの等身大の弱さと後悔、そして悲しみを乗り越え成長した姿を丁寧に描いている。自己中心的な行動による結果に対する責任感の芽生え、命の重さを学ぶ過程が描かれているが、うさぎという存在が持つぬくもりや魅力を取り入れることで、ネガティブな感情だけに偏らないよう工夫されている。

「豆助になったクロ」 朝日ひかる（岩手県）

〈受賞理由〉 主人公・勇太は、学校の閉校や親友の転校で寂しい思いをしていたが、近所の中村さんの柴犬・クロと遊ぶことが癒やしだった。中村さんが倒れ、後遺症で歩けなくなり、勇太は一時的にクロの面倒をみることになる。犬を飼うこと

の難しさを実感しながらも、引き取りたいと願ったが、環境が整わず、保護団体を通して新しい飼い主のもとへ送り出す。新生活初日、新しい学校へ向かう道でクロと再会し、新しい飼い主に大切にされている様子に安心する。

この作品は、飼い主に何かあった時の備えの大切さや、飼いたい気持ちだけでは不十分で、適切な環境が必要であることを描き、動物を飼うことの責任と現実を、感情的になりすぎず冷静に伝えている。

また、動物と人間の関係性だけでなく、家族や地域社会のつながりにも触れており、幅広い読者層に共感と理解を促す作品となっている。

「ナミイのはばたき」 藤田くみこ（東京都）

〈受賞理由〉 主人公・チイちゃんは羽化不全で飛べないアゲハチョウを保護し、ナミイと名づける。ナミイに父親の転勤で居場所も友達もない自分の姿を重ね合わせ、不公平で厳しい現実に嘆きながらも、懸命に生きるナミイの姿から、どの命も誰かのためではなく自分の命を輝かせて生きていると確信し、自分も自分のために勇気を出して前へ飛ぼうと心に誓う。

0.6%という羽化率の低さや生態系の現実を描きながら、身近な蝶を通して自然界の厳しさを考えるきっかけとなる作品である。

父親から自然の摂理について聞かされたチイちゃんが「今は目の前にいるナミイの話をしたい」と考える場面は、一つの命への深い愛情と責任感が読む人の胸を打つ。シリアスなテーマを抱えながらも、ファンタジーの要素を取り入れることで、重みと温かさが調和した、読後感のよい作品である。

「つなぐ、エメラルド」 はるたけ こはね（福島県）

〈受賞理由〉 主人公・文香は、は虫類ショップ「ハチマル」の店長である父を持つが、コーンスネークにかまれたトラウマで、は虫類に触れなくなったことに悩んでいた。は虫類好きを隠す同級生・莉奈と出会い、は虫類セミナーで莉奈の従

姉・晴子とも知り合う。セミナー会場外で起きたイグアナ遺棄事件で父が活躍する姿を見て、文香は、は虫類に触れられない自分の弱さを打ち明ける。励ましを受けて前向きになった文香を見て、莉奈も自分の「好き」と向き合う決意をする。

は虫類という珍しい題材で終生飼養や適正飼養の重要性を丁寧に描いた作品である。苦手意識との向き合い方だけでなく、「好き」をどう大切にしていくかにも焦点が当てられ、「好き」の形にはさまざまなあり方があることに気づかされる。好きを隠さずにいることは、自分を肯定し、人との絆を深め、多様性を受け入れることにもつながっていくという、動物を通じて人として大切なものに気づかせてくれる作品である。

なお、入賞作品のうち大賞、優秀賞作品を収載した「第37回 日本動物児童文学賞受賞作品集」をご希望の方（1人1冊に限る）に頒布いたします。希望される場合には、住所、氏名、電話番号、上記作品集希望の旨を明記のうえ、切手320円分（送料）を同封し、下記までご連絡ください。

【連絡先】

〒107-0062

東京都港区青山1-1-1 新青山ビル西館23階

公益社団法人 日本獣医師会 事務局

「第37回 日本動物児童文学賞受賞作品集」担当

お問い合わせ：

TEL 03-3475-1601 FAX 03-3475-1604

E-mail：bungaku@nichiju.or.jp